

民衆詩派の詩人・白鳥省吾『共生の旗』考(二) 郷土愛を超えて

千葉 貢

第一章 郷土に育まれて

(一)

白鳥省吾は自然と人間の不可分や身土不二の尊厳、そして「共生」すべき必然性を自らの家郷と時代の中で体得しつつ現実的にも社会的にも目覚め、身土の「共生」を願いながら創作し続けたところに「民衆詩派」と呼ばれる所以がある。省吾はその「共生」を阻害するよつな人間の歪みや矛盾、ディレンマ、あるいは政策や風潮などを具体的に捉え、告発することによって民衆の覚醒を促し民衆との一体感を希求し続けたのである。自らの家郷や生い立ちと関わり合い、通じ合える人々である民衆という同志との連携、連帯、協調なしに「共生」はあり得ないとする省吾の思いが、農山村の窮状や惨状を目のあたりにして「文明開化」や「近代化」に託^かつけた政策の歪みや矛盾を告発

し、苦境に喘ぐ民衆の心情や立場を訴え続けたのである。こつした姿勢は次の一篇にもよく表われていると思うので紹介したい。

田園の恐怖

春の光に

遠い連山の雪が溶け始める

いちばん高い山も藍色に煙り

雪が駒の形を現はす

空に雲雀が歌ふ。

温かな太陽に地のあらゆるものが答へる

木も草も川も鳥も獣も柔かく輝き笑ふ。

田園の人々よ、

尊き自然の心を愛せよ

嘗て太陽によつて時を知れる人々は
いま銀時計を誇り

露を踏む草鞋の代りに自転車を走らせ

ダイヤモンドより堅き歯の上に金歯を光らせる

田園の人々よ

おお猿のごとき浅薄と冒瀆の人生観を脱して

真に深き自然の健康に参ぜよ。

ど、ど、ど、と遠雷の音(カ)して

自転車は田園の路を走り

柴積みて勇み来れる駒は

驚きて麦畑に駆け入る、

ああ物質にやや飽満して

凡ての矛盾と喜劇との渦まくを見よ

用ふることを知らぬ者にとりて

文明は腫物のごとく田園を病ましむ(シ)

田園の人々よ、いや読者諸氏よ、いかがであるつか。 作者の省

吾は、「尊き自然の心を愛せよ」と語りかけ、成上り者の性癖を戒め

「おお猿のごとき浅薄と冒瀆の人生観を／真に深き自然の健康に参ぜ

よ」と願ひ、「ああ物質にやや飽満して／凡ての矛盾と喜劇との渦ま

くを見よ」と悟している。最終行の「文明は腫物のごとく田園を病ま

しむ」という嘆きや告発は、「一九二一年（大正十年）の作を主とし、詩六十六編と散文詩八編とを輯録したものである。」（詩集『共生の旗』の「はしがき」より）という創作当時のものであり、「田園の恐怖」を掻き立てる政治的な危機感であつたということを忘れてはならない。省吾は「文明」がさらに及ぼすであろう「田園の恐怖」を、「一九二一年（大正十年）」にして、しかも家郷の人々に等しい「田園」に生きる多くの農民を介して訴えているところに、素朴な郷土愛を貫いた民衆詩派の詩人たる真髓を思わずにはいれないのである。

省吾は同じ頃にまとめた『詩に徹する道』（大正十年十二月十二日発行、日本評論社）という評論集の「序文」のなかで、「今や詩は新しく解放された、詩は芸術の先駆たらんとさへしてゐる、詩はありふれた詩作法などによつて指導される時代は過ぎた、詩は芸術至上主義的に單獨に社会に存在するものではない。社会との交渉を深く自覚することなしに真の詩は生まれぬ。」などと分析し、必要欠くべからざる日常的な「社会との交渉」に従いながら、「物質文明の矛盾」に侵され、窮地に追い込まれていく家郷の現実を告発し、「自然の健康」と共にあるべき人生や社会の意義と改善への急務を訴えたのである。やがて省吾は、「詩の諸問題」のなかで次のように述べている。

来るべき詩歌は、人間の能力を是認する豊かな生の享樂、個性の自由に向かつて進むべきである。そこに過去の詩の有する長所を一団とし、加ふるに新しき予言的精神を含む詩こそ、吾等の望む真の

民衆詩である。

詩には郷土がなければならぬ、優れた詩にはその発生せる郷土の血脈が打つてゐる。タゴール、ヴェルハアレン、ヴェルレーヌ、カアペンタア、ホイットマン、皆然るを思ふ。私は人間の自由のために、一種の世界主義を渴望するものであるけれども、自分の生まれたる『日本』を揺籃としてこそ詩歌に光あるを信ずる。その点で日本に注入し来る新思想に対して喜びを感じずると共に、日本の文化を正しく知らんとする三井甲之氏等の行き方にも少なからざる共鳴を感じる、私はこの意味で、つねに国土を揺籃とせる国民的詩人を翹望し、これやがて、民衆詩の到達点であることを、機会ある毎に立論してゐる。

省吾は「人間の自由のために、一種の世界主義を渴望し、」国土を揺籃とせる国民的詩人を翹望し「しながらも、なぜに「郷土」の人々に等しい「田園の人々」に対し、「おお猿のとき浅薄と冒瀆の人生觀を脱して／真に深き自然の健康に参ぜよ」と警告を促さなければならなかつたのであろうか。あるいはまた、現実の「国土」は「ああ物質にやや飽満して／凡ての矛盾と喜劇との渦まくを見よ」と失望し、なぜに「文明は腫物のごとく田園を病ましむ」と「予言的精神」を含ませて言わなければならなかつたのであろうか。その真意を質したいのだが、それはもう叶えられない。そこで私は、省吾の家郷に近い「郷土」や「田園」に生まれ育つたという縁もあつて、地元の歴史や

社会、風土、そして四季折り折りの風景を臉に浮かべながら、かつて省吾が心を痛めながら告発せざるを得なかつた疑問の内容や、疑問を生みだした社会的な要因などについて私なりに説明してみたいと思う。

省吾が詩集の題名として掲げた「共生の旗」のもつて、あらゆる命の世界的な「共生」を可能にすることが生きている私たちに課せられた責務であり、実現させることが世界の目的であらう。あらゆる命の「共生」を希求する所以は、「食物連鎖」によつて生き永らえ、「外部経済」や「関係価値」によつて支えられているという現実にとどまらず、「生者必滅」の無常にして「共苦」や「共死」を強いられている命の必然を承知しているからである。省吾が「私は見た／家と星と田畑と曇と／お素朴なる人生はこれらに盡きている」とうたい、「生と死はかくも近いのだ」と語つた「命」と、どのように向き合い、どう向き合つていくべきなのか、あるいはまた、省吾が何度も指摘した「文明」や、それを具体的に受容してきた「近代化」について、迂遠と思われるだろうが私なりに追求してみようと思う。

(一)

我が国は、今を溯ること百数十余年前の明治維新（一八六八年）以来、「文明開化」の名のもとで「脱亜入欧」を掲げ、「殖産興（工）業」「富国強兵」を国是として進歩、発展、開発、成長、スピード化、豊かさ、便利さなどをもたらすべき施策に心血を注ぎ、性急に、しかも

強力に推進してきたという歴史は周知の通りである。これまでの日本は、明治二十七、八年（一八九四 九五）の対清戦争、明治三十七、八年（一九〇四 〇五）の対露戦争、やがて一九一四年のサラエヴォ事件（オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子とその妃夫妻が、セルビア人青年に暗殺された）を導火線として始まった欧州大戦（第一次世界大戦、一八年にドイツが降伏。翌年のヴェルサイユ条約によって終結）に参加したり、満州事変（一九三一 昭和六年、すなわち一五年戦争への突入）や日中戦争（一九三七）を経て太平洋戦争（四一年十二月、第二次世界大戦）へと戦場を拡大したりして、依怙地になるほど国威の誇示に努め励み続けるという「富国強兵」の国策（この要因には、幕末に締結せざるを得なかったアメリカなどの和親条約や修好通商条約、いわゆる不平等条約を早期に撤廃しなければという国家目標と、屈辱を払拭したいという憂国士たちのヒロイックな心情に駆られたであろうことは想像に頑くないのだが。）によって、いかに筆舌に尽くしがたい犠牲や惨状、惨劇を生み、甚大な被害をもたらしたことが、これらの事実を決して忘れるべきではないだろう。

こうして我が国の農山漁村は、長い間の戦争によって疲弊し、都市という都市は空襲によって荒廃を極めたものの、一九四五（昭和二十）年の無条件降伏と共に気を取り直して立ち上がり、新たな国づくりを始めたのである。やがて国の財政上は、朝鮮戦争（一九五〇年六月から五三年七月休戦）やベトナム戦争（一九六〇年から七五年）などによる特需景気も加わり、戦後の復興を着実に展開し、経済高度成長を

重ね（一九五五 六七年の国民総生産の年平均伸び率は一〇・一％に達しており、一連の高度成長政策の予想値五 九％を上まわるものであった）、一九八七年（昭和六十二年）には一人あたりの国民総生産が世界第一位になった、とはいうものの、国家独占資本主義の発達による産業構造と階級を持つ安普請に等しい経済大国であったことを証左するかのように、それまで蓄積されてきた貿易黒字が「バブル」を生みだしたのであった。

今やバブル（泡）は文字通り儂く消え去り、虚構の経済大国にして虚宴に酔い痴れた後にも等しく景気は低迷し、大手企業と言えども倒産、かつ統廃合に追い込まれ、リストラばかりにして失業率は史上最悪と言われるまでに上昇しつつある。³⁾ 中高年者の再就職はもとより新卒者の就職もままならず、自嘲ぎみにフリーターと称して一時凌ぎに甘んじている若者が多く、契約社員、派遣社員、裁量労働、フレックスタイム、ワークシェアリング、SOHO、起業家、ベンチャーなどという経済用語が飛び交っている。新聞や広告を見るたびに価格破壊、値下げ競争を強いられるデフレ状態からいつ脱出できるのか、不透明にして不安に駆られるなかでIT革命、国際競争、グローバルেশョン、規制緩和などの言葉と共に、行財政改革、構造改革、民営化などという文字や声ばかりが耳目に飛び込んでくる。

だが、こうした不況や不安を生み出すことなく便利で豊かな生活と幸福、平和と安全、安定などを保障してくれるのが文明開化であり、近代化の目的だったのではないだろうか。このような目的を承知

していながら幕末に抱いた劣等感（トラウマ）のために、「脱亜入欧」とばかりに西洋の崇拜や模倣に偏執し、文明開化や近代化の真意を考察することがなかったのである。西洋に追いつくための「富国強兵」「殖産興（工）業」の掛け声のもとで、中央集権化の威信を賭けて急いできた国策のツケが、国民の一人ひとりをモノ化の如く物質的な画一化、類型化という不自由にして不平等な窮地に陥れ、倫理観や理性に満ちた人間性を削ぐという犠牲を強要してきたのである。即ち、「便利で豊かな生活を」というその条件や本質を究めることなく上辺だけの虚飾を求めるあまりに、人間そのものがものの見事にモノ化してしまったのである。だから「日本経済の『高度成長』の実質は、労働者を中心とする大多数の国民の『取り分』が一割以上も少なくなり、それだけ資本家側の所得が増大するという、あくなき搾取と収奪の強化にほかならなかったのである。」という批判があっても然るべきなのである。田中義久氏は次のように続けている。

このことは、さらに、先進資本主義国の国民総支出の増加の要因をみれば、いっそう明瞭になる。国民総生産と同じように国民総支出も年々成長し拡大するものであるが、その増加の要因をしらべてみると、アメリカ、フランス、イタリア、西ドイツでは、いずれも個人消費支出が増加寄与率の六割をこえている。ところが、わがくには、機械装置なども固定資本形成（設備投資）の比重がいちじるしく大きく（四一％）、各国のそれ（いずれも二割以下）をは

るかに上まわっている。（『経済白書』）。日本は、けっして、「高度成長社会」などではないのだ。（中略）巨視的にみれば、今日の社会変動のなかにも、戦前の日本資本主義の発展過程において見られたそれとおなじように、国際競争場裡（だれの競争であるかを考えてみればよい。資本が競争しているのであって、民衆は連帯を求めているのだ）に対処するための強引な資本蓄積と、民衆にたいするその「しわよせ」の転嫁という対比が、みごとにひきつがれているのである。「百姓は生かさぬように、殺さぬように」とか「ごまと同じと考えて、しほれるだけしほれ」という封建支配層の民衆観は、いかに「繁栄をつうじて平和と幸福」（『PHP』）の欺瞞をふりまこうとも、構造的にひきつがれてきていると言っても過言ではない。ただ、矛盾の焦点が「百姓」（農民）から「サラリーマン」（労働者）に変わっただけである。（傍点も原文のまま）

私もまた、「日本経済の『高度成長』の実質」は「強引な資本の蓄積と、民衆に対するその『しわよせ』の転嫁」が一層乖離拡大し、その「矛盾の焦点が『百姓』（農民）から『サラリーマン』（労働者）に変わっただけである」という思いを禁じ得ない。田中義久氏のいう「強引な資本の蓄積」は、大手企業各社の社屋と称する高層ビルの建設費や設備投資、企業活動の拡大費用（例えば、新聞、雑誌などに掲載する広告、テレビやラジオを利用する宣伝など）、さらには政治献金となり、近代化の一環である「富国強兵」の新たな資金となって政府開

発援助（ODA）や国連への拠出に用いられてきたのである。

その一方では「民衆に対する『しわよせ』の転嫁」を重ね、各地で多発し続けている多種多様な「公害」（「公害」と名付けたところにも欺瞞臭さを感じ、言葉の真意を問いたくなるのは決して私だけではないだろう）を生みだし、「公共事業」による環境の悪化を招いてきたのである。従って、「これらの『しわよせ』をそのまま放置すれば、

「公害」に甘んじてきた民衆から告発されたり、自己矛盾に目醒めた「サラリーマン」（労働者）からも批判や反発されたりして、企業の歴史的にして社会的な責任や企業倫理が問われ、健全な企業活動の回復を求められるのは必然である。即ち、企業を支えているのは民衆であり、民衆もまた企業によって支えられているという「交換価値」を超えた「関係価値」⁵について理解すべきであろう。さらには企業と人、そして自然との三位一体、相互依存と互惠互助の理念を再認識し、その補完体制を再検討の上、再構築すべきではなからうか。

従って、これまでの「強引な資本の蓄積」による「バブル」が弾けたのは必然であり、むしろ「公害」に対する保障や「公共事業」による環境の悪化を防止するために改善したり、抑制、かつ保全したりする「資本」の方が、これまで「蓄積」した以上に龐大であり、その投入すべき当然の費用を確保しなければならぬという皮肉な矛盾を思わずにはいられないのである。重ねて言えば、「日本の経済の『高度成長』の実質」は「富国」をもたらしたものの、民衆に対しては「公害」や自然破壊、環境の悪化、あるいは多種多様な、モノに浮かれた

人々による抑制のない傍若無人な言動の横行、倫理観や道徳観念の稀薄化などに伴う俗悪化、低俗化という「しわよせ」やツケ、そして反動などをもたらし、それらの除去や正常化への回復のために四苦八苦しつても社会の劣化、人間としての潜在的な地力じりきの衰退を余儀なくされているというのが現状なのではなからうか。

こつした醜態は、「一将功なりて万骨枯る」とでも喩えられようか、経済的な「高度成長」を促し「富国」に至り、多くの「しわよせ」に喘ぎながら、さらなる豊かさや便利さを求めようといつか。「矛盾の焦点が『百姓』（農民）から『サラリーマン』（労働者）に変わっただけである」という田中義久氏の指摘に教えられるまでもないが、この「矛盾」を生みだしてきた根本的な要因こそが「文明開化」と共にあり、「文明」の性質がもたらす必然であることを正確に認知すべきであろう。「文明」の真意や本質を解明することによって、矛盾やツケなどの除去はもとより、「経済高度成長」と「しわよせ」、企業活動と「サラリーマン（労働者）生活」などの「背に腹はかえられぬ」に等しいディレンマ、あるいは自己矛盾、社会的矛盾などの解消にも通じると思われるのだが、いかにであろうか。「文明」の真意や本質を究明せずに現状を肯定し続けるなかでの施策は新たな矛盾や弊害を生むだけであり、改善をもたらすべき改革として名折れであろう。それでは、「文明」の性質について私なりに探求してみよう。

文明 まず手元にある辞書の説明によれば、「①文教が進んで人知の明らかなこと。②（civilization）都市化。④生産手段

の発達によつて生活水準が上がり、人権尊重と機会均等などの原則が認められている社会、すなわち近代社会の状態。蒙昧・野蠻。□宗教・道徳・学芸などの精神的所産としての狭義の文化に対し、人間の技術的・物質的所産。「文明開化」人知は開け、世の中が進歩すること。特に明治初年の近代化や欧化主義の風潮を言った。（中略）びょう。（「文明病」）①物質文明が極度に発達した結果として生ずる病症。②性病の俗称⁶。などと記述されている。言葉の意味としてはいずれもこの通りだと思つのだが、「明治初年の近代化や欧化主義」の国策として「文明開化」を掲げ、性急な「富国強兵」「殖産興業」に引き続き、「経済高度成長」を煽られながら奮進してきた結果や現実とは、必ずしも語義通りに叶っているとは思われないのだがいかがであろうか。むしろ「文明」の真意に反するような所行を重ね、「公害」と名づけられた「しわよせ」やツケ、矛盾を拡散し、自然破壊に伴う環境の悪化をもたらし、窮地に追い込まれている状況についての説明してくれるのであろうか。辞書を編纂した人や説明文の執筆を担当された方は、意外な展開に驚いておられることであろう。文明の真意に反し、むしろ逆行するような事件や事故が多発している近年だけに、いかなる人々も説明し難いのではなからうか。そこで私は思う、これらの現状は「文明」そのものが宿している性質の具現であり、「文明」の扱い方を間違えてきた人間の愚行である、と。あるいはまた、「文明」に秘められている陥穽や自惚れの強い強欲な人間の驕りであり自己矛盾などの露呈であると。

文明は辞書の説明にもあるように、「生産手段」を駆使する「人間の技術的・物質的所産」であり、必然的に変化を伴つのだが、その変化が必ずしも人間の「開化」を促し「近代社会」へと進歩発展させるものではないのである。即ち、文明によって開発された多種多様な変化は、「近代社会」を展開させる要素にはなつても、人間の「精神的所産」にして倫理観に等しい「人権尊重と機会均等などの原則」が遵守されるように進歩発展したかといつて必ずしもそうではないだろう。むしろ、人の道に悖るような瞞された、盗んだ盗まれた、殺した殺された、などという悲惨な事件や事故、残忍な犯行が報じられるたびに耳を疑いたくなるのは決して私だけではないだろう。これらの一因は「文明」に対する誤解と共に始まつた近代化政策が醸し出した暗部であり、必然の結果であると言えよう。人は瞞そう、盗もう、殺そう、と思つて生まれてきたものでも、瞞されよう、盗まれよう、殺されよう、と願つて生まれてきたものでもない。まして犯罪者になるべくして学校へ行くのでも教育されているものでもない。それだけに、「文明開化」に伴う多種多様な事象や変化を進歩や発展と見做し、「近代社会」を構築するために必要不可欠な要素とばかりに是認したり盲目的に溺愛したりして来たことも否定できない一因である。

今や、「明るく平和で、便利で豊かな生活」を誇示してきた多種多様な事物の製造と取得とに比例するかのように、それこそ多種多様にして深刻な「文明病」と言つべき弊害や歪み、「公害」と称するツケやしわよせなどが蔓延している。それらを払拭すべく対策や保障に追

われ、その治療方法の開発と普及のための苦悩に喘ぎながら、「人知が開け、世の中が進歩する」という皮肉な「近代社会」が「死に体」の如く息づいていく。それだけに誤解や錯覚に満ちた「欧化主義」に基づく施策を改め、変化に眩惑されてきた進歩至上観やモノ依存症より脱皮すべく自己改革に心血を注ぐべきときが来たのだと言えよう。従って、私は「文明」や「近代化」「進歩」などの語義に限らず、人口に膾炙されている「自由」「平等」「博愛」「平和」「人権」などを含めた「民主主義」についても、その真意を探求し再検討すべきであると、近年の事件や事故、選挙結果などを見聞きするたびに切実に思うのだがどうであろうか。

(三)

文明 (civilization) それは、その語幹であるcivili(市民の、公衆の、都市の、などの意) からして多くの人々を意味し、多くの人々が集まって営まれる活動や発揮される情熱、醸しだされるエネルギーなどが文明の源泉であり本質である。従って、文明は多くの人々が集まることによって形成される「都市」に発生し、「都市」を構成する多くの人々によって創りだされるのである。都市と文明は同じ穴の貉に等しい生きものであり、小賢しく変化を重ねて生息しながらも、やがて終わりのない冬眠の如き末期を迎えるのである。これは日本の「文明」、即ち「都市」として決して例外ではない。

日本の首都・東京は、それまでの「江戸」という名を改めていち早く文明開化を受容してきた象徴的な都市であることは今更言つまでもないだろう。「東京」に先立ち、日米和親条約(別名、神奈川条約。一八五四 安政一年)によって下田、函館を開港し、続いて日米修好通商条約(一八五八 安政五年。即ち、関税の自主権がない、領事裁判権 治外法権 等に於いて不利な、いわゆる不平等条約であった。)に基づいて開港した横浜、新潟、神戸、長崎などを含めた各地の港町と共に、国道や鉄道の敷設、後年の高速道路や新幹線の開通順と場所を指折り数えてみるまでもなく、日本の都市という都市は扇状地帯の下流、沖積地の広がる河口沿いの海に面し、かつ港をもつ工業地帯である。それは人を集めるだけの理由があつたのである。

我が国は「明治初年の近代化や欧化主義」による「文明開化」と共に「富国強兵」「殖産興業」を国是に掲げ、その一環として諸外国から原材料を輸入し、港の工場で加工を施し製品化し、直ちに輸出するという作業を繰り返す上で好都合なので港に工場を建て、田舎と呼ばれている地方から人夫(そのほとんどが農民や漁民である)を集め、商品づくりのサラリーマン(労働者)に仕立て上げてきたのである。従って、田舎(地方)に住む人々が激減(過疎化)し、港のある工場地帯が都市化し過密化するのには必然であり、サラリーマン(労働者)化した都市の人々が生産者として、かつ消費者として日夜繰り返す活動が基本的な文明なのである。その文明が生み出す歪みや矛盾、弊害がその都市にて多発し、その都市だけにとどまるものならば、因果応

報にして自業自得とばかりに一笑に付すこともできるのだが、文明によるそれらの「しわよせ」は深刻な状況に変えながら拡散すると共に、田舎（地方に広がる農業や漁業、林業などの生業や共同体）が保持してきた、それこそ多種多様な文化や伝統、民俗習慣などを排斥し破壊してきた事実を想起するたびに、またしても文明そのものの性質について懸念を持たざるを得ないのである。

だから「矛盾の焦点が『百姓』（農民）から『サラリーマン』（労働者）に変っただけである」という田中義久氏の見解は、文明の性質を指摘したものであり、この傾向は日本の都市や田舎にとどまらず世界の各地にその歪みや矛盾、弊害を含めて流布し、「しわよせ」をも拡大している。即ち、これまでの「文明開化」と共に始められた「殖産興業」「富国強兵」政策に駆り立てられ支えてきたのは、その多くは田舎の百姓（農山村民や漁民）たちであることを忘れてはならない。つまり、かつては兵士として人柱となつて北の大地や南方の海に消え、あるいは企業戦士となつて国家の礎を築いてきた人々のことを意味するのである。今や多くの人々は工場のある都市生活者となつて、「サラリーマン」と呼ばれ、水や食糧がどのようにして確保され生産されているのかさえ無関心にして無理解な人々が増えつつあり、虚構に満ちた「近代的な生活」を貪るばかりである。だから欧化主義や文明に対する誤解は続き、却つて矛盾を矛盾と思わせないような情報や風潮に惑わされて数々の歪みや弊害、ツケやしわよせ等の削減や解消を図るべき方向が目指しにくい状況になってきたのではなからうか。だから

こそ「文明」の真意について追求したくなるのは決して私だけではないだろう。

文明に対する誤解 それは明治維新以降に量産されたインテリゲンチア（*intelligentsia*、ロシア語。知識人。知的生産に従事する社会層。以下、インテリと略称する。）と称する人々の「優越感と劣等感」が交錯する特異な心理がもたらしたのである。誤解を生みだすインテリたちの心理は、イギリス（アメリカ生まれ）の詩人・評論家である、T・S・エリオット（Thomas Stearns Eliot）の「詩人というものは現在あるがままの自己を、なにかより価値のあるものにたえずゆだねてゆくことなのだ。芸術家の進歩とは、いわばたえざる自己犠牲、たえざる個性の滅却なのである。」⁽²⁾という厳しい自己との闘いを怠り、打算的にして軽佻な技巧による自己満足感に陥りやすいのである。さらにT・S・エリオットは別の章にて次のように述べている。

われわれの到達し得る地点は、せいぜいこれら文化の諸条件が人間という存在にとつて、「自然」であるという認定にとどまります、われわれはそのような条件を奨励するうえにほとんど何事もなし得ないとしても、その途上に横たわる知的誤謬と感情的偏見とを相手に戦い得るといふだけの認定にとどまります。その他のことは敢えて問うことなく、われわれが互いに各個人としてのみずからの改善を計る場合と等しく、比較的細目の特殊例に即して、社会の改善を期すべきであります。われわれは「余自身を別個の人間に改造しよ

う」ということはできません、われわれは「余はこの悪習を廃して、このよき習慣に親しむために努力しよう」と言い得るのみでありません。それと同様に、われわれが社会について言い得ることは「われわれは行き過ぎもしくは欠点が誰の眼にも明瞭な甲もしくは乙の特定の場合に、それを改善することに努力しよう。それと同時にわれわれはできる限りの視野をわれわれの限界にとり入れるよう努力しなくてはならない、かくしてわれわれは一つの誤りを正そうとして他の何ものかを誤らせないように注意しなくてはならない。」これだけに留まります。

このように、私達は素朴にして率直な心情を喪失してはならないのである。あるいは、またしても莊子のいう「彫琢して朴に復り、塊然として独りその形を以て立ち、紛として封戒し、一に是れを以て終わる。」や、老子の「虚を致すこと極まり、静を守ること驚くす。万物、並び作るも、吾は以て復るを觀る。夫の物の芸芸たる、各おの其の根に復帰す。根に歸るを静と曰う、是れを命に復すと謂う。命に復するを常と曰う。常を知るを明と曰う。常を知らざれば、妄作して凶なり。常を知れば容なり。容なるは乃ち公なり、公なるは乃ち王なり、王なるは乃ち天なり、天なるは乃ち道なり。道なるは乃ち久しく、身を没つるまで殆うからず。」などという「各おの其の根に復帰す」べき「落葉帰根」にして「虚飾をけずり落してもとの素朴さにかえる」べき「運命随順」の処世觀の涵養と確立を願わずにはいられない。そ

して、世阿彌のいう「一方の花を極めたらん人は、しほれたる所をも知る事あるべし。然ば、この『しほれたる』と申すこと、花よりもなお上の事にも申しつべし。花なくては、しほれ所無益なり。」や、「因果ノ花ヲ知ルコト、極メナルベシ。一サイミナ因果ナリ。(中略)マタ、時分ニモ恐ルベシ。去年盛リアラバ、今年八花ナカルベキトヲ知ルベシ。」という因果心報の必然、さらには「春ことに花の盛りはありなめど相見むことは命なりけり」(『古今和歌集』のなかの「よみ人知らず」)や「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」(『古今和歌集』のなかの紀友則)、「いちはずの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春ゆかむとす」(正岡子規)、そして「元日や冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」「散る桜残る桜も散る桜」(いずれも作者不明)などと詠われた素朴な心情や事実に共感したり感傷したりせずに、非科学的だ、非建設的だとして無視することからインテリたちの誤解が広まったのである。

国の違いを超えた人々の素朴さや無常感、もの事の必然を知る素直な感性などは、「文明開化」の具体的な指針であり手段であった「富国強兵」「殖産興業」「脱亜入欧」の強迫観念によって排斥され、「定向進化」の過程のなかですっかり忘却したのである。洋才を自負自認するインテリたちは、欧化を先取りする優越感と、欧化に遅れまいとする劣等感が複雑に交錯、相剋し合うという近代日本が生みだした特異な心理や観念を増殖してきたのである。このようなインテリたちは、西洋に関する見識ばかりが肥大するだけで、文明の真意や近代化

の本質を探究することなく、多種多様なモノ、や変化に眩惑されながら現状を肯定し、むしろその変化こそが進歩発展であるとして得意になり、さらなる変化を強要する言動を啓蒙とばかりに美名を用いて虚飾を重ね、その地歩を固めてきたのである。だから「文明」や「近代化」を知ったか振りして追従する以前の素朴さや「落葉帰根」の必然と転生、循環、そして「生者必滅」の無常感などの東洋の思想や精神を「脱亜」とばかりに一蹴してしまったのである。インテリと称する人々の心の奥底や、我が身に宿る血筋の然らしめるところによる一縷の懐郷心や懷疑心、不信心や罪障感、後ろめたさが息づいていても、欧化の移植に等しい近代化の潮流に翻弄され、物的にして外的な「変化」に攪乱され数奇な事物を獲得しようとする進取気どりの劣等感や功名心が誤解を助長し虚構を食ってきたのである。

私は、このようなインテリ特有の心理や性向はもとより、これまでの言動について今や遅しとばかりに再検討すべきときが来たのだと思う。このインテリの出自と特徴について、イギリスの歴史家である、A・J・トインビー（Arnold Joseph Toynbee）は次のように説明しているので参考にした。

わが西欧社会の内的プロレタリアートの中には、もう一つ別の、異文明所屬者の一隊が含まれている。このグループは、身体的に先祖伝来の郷土から追及されたわけではないが、精神的に浮浪化し、方向を見失った人びとである。生活を異文明のリズムに適応させる

という問題を解決しようとしている社会においてはどこでも、電流を一つの電圧から他の電圧に変える「変圧器」の役目を果たす特別の社会階級が必要である。そして、この要求に応じて生まれる往々にして短時日のうちに、かつ人為的に造り出される階級は、それを言い表わす特別のロシア語の名称から、一般にインテリゲンツィアの名で呼ばれるようになった。

インテリゲンツィアはしだいに伝統的な生活がすたれてゆき、ますます多く、外部から侵入してきた文明がその支配に服する外国人に押しつける様式に従って生活するようになってゆく社会的環境の中で、かれら自身の社会が、彼らの仲介によって、自己の地歩を保てるようにするために必要な程度に、その侵入してきた文明のやり口を習得した、一種の連絡將校の階級である。^(註)

私は大いに共感を覚えたのだが、いかがであろうか。我が国は、「外発的」な「欧化」に等しい「文明」を、「その支配に服する外国人に押しつける様式に従って生活するようになってゆく社会的環境の中で」、「特別の社会階級」として、かつ養成機関として、「高等学校」や「帝国大学」が、「短時日のうちにかつ人為的に造り出される」ことを担い、いち早く心身共に「欧化」した卒業生を「インテリゲンツィア」の典型として評価し、国政に携わる中央省庁や政商に等しい財閥を含む大手企業の人材として登用し、意識統一された「官僚」や資本家に仕立てあげてきたのである。だから高学歴をもつ者がインテリの必須

の条件であるかのように見做したり優遇したりしながら學歷を偏重し、學歷に固執しがちな虚構や虚勢に満ちた近代、的な価値観を助長してきたのである。即ち、欧化に等しい「文明」を受容し流布、普及させるべき『変圧器』の役目を果たす特別の社会階級』を學歷によって「短時日のうちに、かつ人為的に造り出す」必要があったのである。

さらにA・J・トインビーの説明を参考にすれば、日本のインテリもまた幕藩体制の崩壊に伴う「明治維新」に託つた「近代化」によって変化を来たし、「伝統的な生活がすたれてゆき、ますます多く、外部から侵入してきた文明」を有難たがり、「その支配に服する外国人に押しつける様式に従って生活するようになってゆく社会的環境の中で、「自国」のすべての過去を非近代にして古くさい、遅れている、とばかりに一蹴することによって自らの劣等感を打ち消し、「自身の社会が、彼らの仲介によって、地歩を保てるようにする」手段として性急に「文明」を受け入れ、欧化に迎合しやすい「高學歷」をもつ新たな「特別の社会階級」をなすインテリの養成と量産、獲得、そして保護に腐心してきたのである。だから中央省庁の官僚や地方の役人などの行政に関して来た人々に限らず、色々な分野で活躍された「連絡将校」に等しいインテリたちの「進歩的」な言動が、「文明開化」と共に始まった日本の近代化を具体的に施し、今日に至らしめた影響や責任は当然のことながら甚大なのである。そのインテリたちは、自らの身分や地位の向上と保護を図るかのように色々な役所や機関、さらには複雑にして多岐に亘る部署や職階名を創出し、保身と優遇を怠ら

ない「特別の社会階級」の人々なのである。

(四)

我が国の特異な「明治の精神」を貫いた夏目漱石は、先見の明をもって「西洋の開化（即ち一般の開化）は内発的であつて、日本の現代の開化は外発的である。こゝに内発的と云ふのは内から自然に出て發展すると云ふ意味で丁度花が開くやうにおのづから蕾が破れて花弁が外に向かふのを云ひ、又外発的とは外からおつかぶさつた他の力で巴むを得ず一種の形成を取るのを指した積なのです。」と断言し、憂国の文士とでもいへべき生涯であつた。即ち、日本の近代化は一八五三（嘉永六）年の黒船来航以来の欧米諸国の圧力に刺激された「外発」によって始動したのだから「排外」や「欧化」もまた必然であつた。それまでの幕藩体制や封建制、あるいは国学や儒学、仏教などをことごとく「非近代」として断罪し一蹴した上での「高學歷」でありインテリなのだから、その知識はほとんど「脱亜入欧」通りの「定向進化」であつた。いかに「富国強兵」の確立を急ぐ国策とはいへ、インテリたちが熱心に獲得した知識は『変圧器』の役目を果たすべくして自国に都合よく解釈してきたものである。たとえ誤解や曲解したままであつても、国策の実施を急ごうとする国の事情からも文明や欧米に関する実務的な情報が多かつたので消化不良に陥り、抽象的な觀念を肥大させ、幻想や錯覚を増殖させるばかりだったのである。

時のインテリたちは、国家の再建に寄与すべき期待を担い、「近代化」の確立を目指す使命に燃えて自由にものを考えることができたとしても、自由にものを考えるべき素材が欧米の知識や情報、事物に限られ、しかも文明や近代化の何たるかを考察せずに理解もしていないのだから、決して公明正大な判断や方向、結論なのではなく、むしろ不自由を余儀なくされたなかでの「不自由な思考」であったと言える。従って、こうした自虐的にして「不自由な思想家」であるインテリたちは、「欧化主義」「辺倒、文明至上主義に自惚れるあまり不自由を不自由とも思わず、何事についても知ったか振って手前勝手に語り、「文明開化」や近代化の風潮を職権と共に煽情し、その普及と拡大に多大な影響を与えその徹底に貢献してきたのである。だから、このようなインテリたちの象徴にして権化にも等しい官僚や役人、資本家たちが国づくりに果たした役割や効果も筆舌に尽くしがたいほど顕著であり甚大なのだが、「公害」や「環境破壊」と名づけられた弊害や歪みをも含む矛盾やディレンマに喘ぐ今日に至らしめた責任もまた絶大なのである。だから、私達もまた日々「公害」や「環境破壊」に加担せざるを得ない「文明」を受容した「便利で豊かな生活」に伴う矛盾を解消し、ディレンマから解放されるための新たな生き方や考え方を希求しなければならぬのである。そのためにも今日の私達が過去の責任を分かち合い、多くの英知を結集して新たな試行に挑むときが来たのである。

だが、今も猶「不自由な思想家」であるインテリは、「情報」の発

信気取りで発言する機会を利用したり多弁がもて囃されたりするので益々得意になり、矜持や自負心、優越感を肥大させ、自己満足に陥りながらも、それでいて真のインテリとしての力量を養成すべき肝要の知識や思想、精神は相変らず「文明開化」当初の思潮である「脱亜入欧」のままなので、もう新鮮味もなければ深淵な意味もない。これまでも同じように珍奇な欧米の事物や言葉、風俗などを請け売りしたり、相変らず欧化主義という偏重に基づく潮流のなかで形成された「不自由な思想」を語ったりするインテリの役割や機能は終わったのである。それを証左するかのように「安全」は保障されなくなり、「学歴」は「不問」とし、実力や実績を重視する企業が増えてきたのだから、やがて企業だけではなく国の制度や社会の構造をも改善されるであろう。何よりも自己改革、意識改革を迫られているのである。

これまで「近代化」の一環として多くの学校を設置し、「高学歴」をもつインテリたちが教育を施し、またまた「高学歴」をもつインテリたちを大量に輩出してきたのだが、そのインテリの象徴や権化、代名詞に等しい「官僚」や「専門家」、「有識者」、「学者・先生」、「学識経験者」などと言われる人々が、覚えてたの「外国語」や「外来語」、「専門用語」、「学術用語」を用いて関与したところの国策によって、どれだけ多くの人々が色々な被害を受け、不本意な犠牲を強いられてきたことか、「近代化」の歴史を通観して見るべきであろう。これまで清国やロシア、中国、欧米などを相手とした各戦争にとどまらず、今も猶国策による「公害」や「しわ寄せ」のなかにあって、ささやか

な幸せを希求して悪戦苦闘を強いられている多くの人々のいることを忘れるべきではないだろう。これまで幸いにして高等教育が受けられ、最高学府などを了えた「高学歴」をもつ多くのインテリたちを養成し、大量に輩出してきたというのに、皮肉にも学級(校)崩壊が頻出し、学力低下が指摘され、環境の悪化、犯罪の多発などによる社会不安が蔓延するばかりで、諸悪の根源を断ち切り社会の劣化を防止し、制度疲労を改善できないのはどうしたことであろうか。こうした皮肉や矛盾、歪みの要因は、「不自由な思想家」であるインテリの輩出と同様、

各種の制度や政策に於いても、「脱亜入欧」や進歩発展至上主義を絶対視する「不自由な思想」に基づいた「借りもの意識」によって、「付焼刃」的に施してきたところにあるのではないかと思う。それでも「不自由な思想家」である我が国のインテリたちは、中島敦の小説『山月記』のなかの主人公である「博学才類」の李徴が、「虎」にならざるを得なかった理由について、「進んで師についたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといってまた、おれは俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、わが臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。」^(註)などとして、通りかかったかつての親友・袁修に告白したように、自省し、かつ悔悟するであろうか。むしろ多くのインテリたちは、さらに進歩させるべき遅れを口実に現状の不満を述べ、その責任を未来へと転嫁するのである。なぜならば、自らの本音や責任は決して明らかにできないから、「最高学府」を出たという「高学歴」に拘泥する見栄や狡猾さを隠蔽した、

偽善的にして功利的な言動を貫き、常に未来を語る。未来は誰もが予測しがたい故に色々な可能性や願望が語れるからであり、その未来にはすでに自分は存在しないし忘れられてしまつから、今日はもとより未来に果すべき責任も生きている限り装うことができるのである。それはまた、「欧化主義」という「自由」のなかで身につけた進歩発展至上主義や、進歩発展依存症候群とも言うべき「不自由」について気づいてもいないからである。

「西洋文明」という進歩を事とする変化に幻惑されることなく日本の「近代化」を考えるならば、自然の生態系を受容した素朴な「落葉帰根」「運命随順」の処世観、「春」ことに花の盛りはありなめど相見むことは命なりけり」「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に」(共に『古今和歌集』より)と詠われた無常感、そして農民や民衆と共に「可惜ものだなあ」「可惜命をなあ」などと語り継がれている「可惜」の精神を育んできた風土や文化、伝統を活かした生業に勤しむことや、「御蔭様で」「御互い様で」と交わし合っている有機的な共同体の存続などが希求されるだろう。生業 それは農林漁業を中心とした食糧の再生産を可能とし、かつ衣住をも確保し得ることなくてはならない。これらの生業は、風土や気候、太陽などによって培われてきた地力^{ちぢりよく}を活かしながら「落葉帰根」「運命随順」、そして無常感などの素朴な処世観や、動・植物の命を与えられながら生き永らえる「食物連鎖」の必然を体得し、熟知する故に「可惜」の精神や「御蔭様」「御互い様」などと交わし合う連帯意識が

育まれてきたのである。こつした精神や意識こそが「文明」の源泉にして本質であり、文化の神髄であると思わずにはいられないのだが、いかがだろうか。

生業とは何も人間に限られたものではない。私達人間の命は動・植物の命を断つ（殺す）ことによつて維持しているといふ自明の事実を無視し人間の都合だけで生業は成立しない。私達は動・植物の命によつて与えられているといふ恩に報いるためにも、動・植物を含めた森羅万象の命を育み合つのが文明や生業ではないのか。断たれる命を「可憐命を」と悲しむことが素朴な人の道なのではなからうか。

お魚おが

海の魚はかはいさつ。

お米は人につくられる、

牛は牧場で飼はれてる、

鯉もお池で麩を貰ふ。

けれども海のお魚は

なんにも世話にならないし

いたづら一つしないのに

かうして私に食べられる。

ほんとに魚はかはいさつ。

生きている私達は、「文明開化」以来偏愛してきた「殖産興業」「富国強兵」「政策や」「脱亜入欧」の「欧化主義」による「不自由な思想家」であるインテリたちが、一様に古くさい、遅れている、と「非近代的」にして「非効率的」であると軽蔑し一蹴しがちな農林漁業を中心とした生業の御蔭によつて多くの命が継承されてきたのであり、自らの命も多くの命に育まれ支えられていることを忘れてはなるまい。

「医食同源」と言われているように、「居職同所」（住まいと働く場所が同じ）であれば、もっと強く命について意識するであろう。命の互恵互助や互換が生業なのだから「御互い様です」「御蔭様です」「御苦労様です」「ありがとつ」などという感謝の言葉を交わし合い、「お月様」「お天道様」「お星様」などと敬意を込めて呼んできたのである。

「お早よう」「今日は」「お晩です」「済みません」などと交わす挨拶も、自然の生態と共に生きているといふ喜びや感謝の表明であると言えるよう。自らの命を育んでくれるすべてのものの命に対して「可憐もんだなあ」「勿体ないなあ」などと愛惜しながら大切に切り扱う価値観や倫理観、「ありがとつ」と感謝を忘れない暮らし方、仕草などの伝統文化をも培ってきたのである。

だが、請け売りに等しい「文明」に関する浅知恵に翻弄され、「近代化」の名の下で自国の伝統文化や歴史を愚弄してきたことが弊害を

蔓延させ自己矛盾に陥り、悲劇を演じ苦汁を嘗め続けているのである。なぜ悲劇なのか。それは自らが自国の数々の伝統文化によって育まれ、それらの精髓を血肉のなかに宿しているからである。命と共に息づいている伝統文化の風土を保全し、維持継承することが真の進歩ではないのか。「文明」や「近代化」と称し、開発の美名のもとで風土を破壊しながら新たなモノをつくり、利益をあげることがどうして進歩と言えよう。損得こそが打算の典型である。私達は「文明」や「近代化」に伴い、風土を利用して生み出したモノの価値を比較したり変化させたりすることに取り憑かれやすいのだが、比較が比較に執着し、変化が変化を煽るといふ自明の原理に従い、モノづくりによって自滅しつつある風土の性質と危機に覚醒すべき時なのである。

つまり、人間を含めた動・植物に限らず、科学技術を駆使して製造したモノであつても歳月と共に形を変え、その命や機能も失っていく。必要なモノならばさらに形を変えたり再生、回復を求めたりするのであろう。それは「文明」や「近代化」を高唱する以前から再三に亘って繰り返して試みてきたのであり、人間を含めた動・植物の命は一回生起の儚さを達観し、継承すべき尊厳と知恵、農林漁業の生業を授けられてきたのである。人間と共にモノもまた形を変え、素材を変え、機能を変えて産出されてきたのである。昔のモノより現代のモノの方が「文明」や科学技術の力が加えられ、立派で頑丈で、形もよく高価（高性能、高品質、多機能。さらには小型で、軽量で、安価などといった宣伝文句が多い）であり、それこそ「便利で豊かな生活」を可能に

してきたモノである。モノは素材や技術によって形を変えられるが、人間を含めた動・植物の命は素材をなす風土や衣食住によって形を変えたり機能を変えたりすることはない（動・植物のなかに環境に適応するために変えるものもある）。従つて、命を育む上で不可欠な技術を含めた素材を再生できる風土を保全し、維持継承することが進歩の真意ではなからうか。風土は命を紡ぎ心を育む素材である。

だから進歩や開発、発展を口実にその風土を改悪したり破壊したりすれば、暮らしたもより生き方にも異変を来し、継承されてきた古典的にして意味深長な習慣や風俗を失い、人間としての心をも失つてしまつたろう。それどころか命の再生産を不可能にしてしまつたろう。それはまた動・植物とて同じ運命を辿るであらう。なぜならば、人間は生き永らえるために加工して何でも食料として利用するが、動・植物は限られたものしか食べないし適応するには長時間かかるからである。だが、「不自由な思想家」であるインテリは、科学技術の「定向進化」に伴う進歩発展開発至上主義を偏愛し過信するあまり、新たなモノや変化を歓迎するだけで、改悪に通じる新たな事態に対する心の変化を黙殺してきたのである。即ち、モノに心が奪われてしまったのである。このような本末転倒の愚行については、すでに紀元前に生まれたといふ中国の思想家・莊子が教えているのだが、やはり「脱亜入欧」の国策に迎合してきた「不自由な思想家」であるインテリだけに見逃す他はなかつたのかも知れない。その教えとは次のような寓話である。文中の「樺」とは「はねつるべ（撥釣瓶）」のことな

ので、井戸から水を汲みあげる作業を思い浮かべながら読んで戴きたい。

子貢、南のかた楚に遊び、晋に反らんとして、漢陰を過ぎ、一丈人を見る。方將に圃畦を為らんとし、隧をつがちて井に入り、甕を抱きて出でて懼く。措措然として力を用うること甚だ多くして、而も功を見ること寡なし。子貢曰わく、「此に械有り、一日にして百畦を浸す。力を用うること甚だ寡なくして、功を見ること多し。夫子は欲せざるか」と。

圃を為る者、仰ぎて之を視て曰わく、「奈何」と。曰わく、「木をうがちて機を為り、後ろは重く、前は軽くす。水を撃ぐること抽くが若く、数かなること洪湯の如し。其の名を桴と為す」と。

圃を為る者、忿然として色を作し、而して笑いて曰わく、「吾之を吾が師に聞けり。機械を有する者は、必ず機事有り。機事有る者は、必ず機心有り。機心、胸中に存すれば、則ち純白備わらず。純白備わらざれば、則ち神生定まらず。神生定まらざる者は、道の載せざる所なりと。吾知らざるには非ず、羞じて為さざるなり」と。

子貢は蹶然として慙じ、俯して対えず。

などと記されているのだが、古典なる故に不可解な用語もあるので主要なところだけでも現代語訳を重ねて引用し、理解に供したい。

子貢は「水をくみなざるなら、よい機械がありますよ。一日のう

ちに百ほどの畦に水をやることができ、労力はいへん少なくて能率があります。あなたは欲しいと思いませんか」と。畑つくりの老人「の質問に答えて「それは木を細工してつくった機械で、うしろが重く、前が軽いようにできています。これを使うと、まるで軽い物を引き出すように水をくみあげることができ、しかも速度がはいいで、あたりが洪水になるほどです。その名は、はねつるべといます」と。畑つくりの老人は、むつと腹をたてたようすであったが、やがて笑って答えた」という。わしは、わしの先生から聞いたことがある。機械をもつものには、必ず機械にたよる仕事がある。機械にたよる仕事がある、機械にたよる心が生まれる。もし機械にたよる心が胸中にあると、自然のままの純白の美しさが失われる。純白の美しさが失われると、霊妙な生命のはたらきも安定を失う。霊妙な生命のはたらきの安定を失ったものは、道から見離されてしまうものだ、と。わしも、その機械のことなら知らないわけではないが、けがらわしいから使わないまでだよ」と。

長い引用になったが、自然と厳しく、かつ真摯に向かい合って生みだされた思想であり、あえて困難や労苦を身に負う強靱な精神や素朴な姿勢をもの語っていると思われるのだがいかがであろうか。

今日の私達は後知恵よろしく機械を拒否しては暮らせないが、畑つくりの老人「の愚直、無分別、頑固、瘦せ我慢、大人気ない、もの分かりがよくない、などと指摘できる性格の現代的な意味を検討してみ

ると、独立自尊の道を勤しむ心意気を秘めた貴重な原動力たり得るの

のはたらきの安定を失う」証左なのではなからうか。⁽⁹⁾

ではないか。が、進歩発展至上主義の昨今に至っては、規制緩和、グ
ローバリゼーション、IT革命が叫ばれ、モノや情報が瞬時に世界中
を駆け巡ったところで心の安らぎが疎外されるばかりで、だから心の
憩いを得たり癒されたり、じつくりもの事について考える時間や場所
が確保できるのであるうか。むしろ多種多様な「機械」に拘束されて
「自然のままの純白な美しさ」を失い、「靈妙な生命のはたらきも安定
を失つ」のではなからうか。人生に彩りを添えてくれる自然の「靈妙
な生命のはたらき」による美しさや変化を看過し、身の回りにある
「機械」の機能や操作に心身や時間が拘束されたり奪われたりしては
人としての「道から見離されてしまう」のではなからうか。便利で、
合理的で、多機能な「機械」と近視眼的に向き合い、手軽で簡単だと
いう操作に追われていては雲を浮かべた大空を眺めたり、季節の移ろ
いを教えてくれる草花を見つめたりするという素朴な言語行動を閑却
し、感動のあまり詩歌を口遊くたんだり感涙に溢れたりするという情緒や
感受性も育たないであろう。従って、自らが生得的に秘めている「純
白の美しさ」を卑俗化し、人としての「靈妙な生命のはたらき」も矮
小化してしまうのではないかと悲観的に思うのだがいかがであろう
か。昨今の進歩的な機械や機具(器)の普及と比例するかのよう
に、国の内外で多発する事件や事故を報ずるニュースを見聞きするたびに
驚きが麻痺し、憂鬱になるのは決して私ひとりではないであろう。案
外、多量のモノや機械(器、具)の獲得と依存によって「靈妙な生命

命は生死を繰り返すのだから後世の命を育むのに必要な風土を保全
保護し、維持継承することが進歩発展であり命ある者の使命なのであ
る。生命の維持継承のために行なうのが生業であり、狩猟採集に始ま
る農林漁業がその基本である。伝統的に伝えられて今あるモノや新た
なモノを比較して、その便不便や価値を決めて損得に拘泥し優劣に固
執すれば、必ずや争いが生じ勝敗に挑めば平和という調和を失う。だ
から何か新しいモノをつくり、変化を来たすことが進歩であるとい
う文明観は、「近代化」による国家の改革を期待され、「脱亜入欧」の先
駆的な代弁者となり「変圧器」の役割を担い、進歩的な啓蒙家を気取
る「不自由な思想家」である「高学歴」のインテリたちによってもた
らされたのである。インテリたちの「進歩的である」という先入観も
また、「文明開化」や「近代化」という期待含みの変化に翻弄されて
生みだされたのである。

こうして日本のインテリたちは明治維新（維新という言葉も期待を
抱かせる効果があり、初めて用いた人の漢字の素養を示すものである。
これが言葉の力である。）以前の政治や歴史、文化を含めた諸事を、
「文明開化」を急ぐ上で「古くさい」と見捨ててしまい、「西洋」に關
する知識や情報をもつことがインテリとなるべき必須の手段や条件で
あり、「高学歴」と共に評価されてきたのである。その「不自由な思
想家」であるインテリたちが、「借りもの」に等しい「文明開化」や
「近代化」の名目のもとで実施してきたのが、「富国強兵」であり、「殖

産興業」なのだから、今日に至るまでの展開や歩みを決定づけたのは言うまでもない。具体的な施策は農林漁業の生業に携わっていた多くの「民」を、国家の威信を図る改革という大義のもとに「富国」の実現を吹聴し、悲惨な「強兵」や過酷な「興業」（工業）に追い立てて移動を余儀なくしてきたのである。なるほど維新や改革は変化を促すので目先を誤魔化しながら進歩してきたのだが、その維新や改革に伴う戦争や戦災の「しわよせ」やツケ、公害と称する反動を引き起こし、暮らしの矛盾やディレンマを拡大するばかりで一向に改善されないはどうしたことであろうか。国家の維新や改革という使命を担い、期待されてきたインテリたちは、さらなる進歩を叫ぶばかりで反省したり悔悟したりすることはない。さらに進歩すればすべてが改善され解決するのだという「文明開化」以来の誤解や幻想、傲慢さが今日に至らしめ、未来に及ぶ無責任をどうして看過することができよう。従って、田中義久氏の「矛盾の焦点が『百姓』（農民）から『サラリーマン』（労働者）に変わっただけである」という説明は、「近代化」とは言い難い国策の欺瞞と矛盾を指摘したものである。

日本の「不自由な思想家」である進歩的なインテリたちは、農林漁業の生業を営む「百姓」たちが育み、自らをも育んできた伝統文化を非近代化の所産であり、遅れている、古くさいものとして打ち捨てることで手取り早い進歩を促し、常に変化を生みだす方法を画策してきたのである。なるほど農林漁業を営む多くの「民」を工場のある都市に移動させてサラリーマン（労働者）化すれば大きな変革となり、イ

ンテリの面目躍如の上なく溜飲を下げる事ができたのである。

だが、「古くさいもの」として打ち捨てきれないのが己の体内を巡る血脈である。「身体髪膚、之を父母より受く。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり」とばかりに、父母より生を享け、長じては秀才の誉れ高く進歩を口走りながらも過去の諸事や伝統文化によって育まれてきた自らの肉体に対する「一律背反的な劣等感や虚勢が、「脱亜入欧」や進歩発展至上主義に掻き立て偏重を助長し、自由を口走りながらインテリの道に甘んじてきたのである。そのインテリは西洋の知識や情報、文物などを先取りしてきたという矜持や自負心、「高学歴」による自得意識や優越感と、「古くさいもの」と軽蔑してきた過去の血肉をもつ自分を捨てたいという虚栄心や劣等感との葛藤や相剋による複雑な深層心理を醸成し秘匿されているのである。未知な「文明開化」に急かされ、頻発する変化に煽られながら過去の自分や伝統文化などを否定しようとして、西洋に関する新しい知識や情報の獲得に躍起となつて動しんできた、これが自己矛盾やディレンマを内包した日本のインテリの特徴であり、すべてが性急にして傲慢なあまりに誤解や矛盾を生みやすく反省し難い要因でもあるのだ、と言っては言い過ぎであるつか。

(五)

現代の悲劇 「文明」や「近代化」の真意を探究するためにも、進歩的なインテリたちが断ち切りたいと願った「血脈」を遡り、非近

代的と毛嫌いし邪慳に扱ってきた農林漁業の生業と共に、農山漁村に息づいている伝統文化を継ぎ、「愚民」と軽蔑してきた「百姓」(百姓とは、色々な技術や道具を用いながら何事でも身をもって働く人々のことを言う)の心を尊重し、かつ継承すべきであろう。そのためにも「近代化」に先駆けて伝統文化を顕彰し理解することが先決義務にして不可欠な条件であろう。例えば、次のような物語はどうであろうか。

じいさんは言った。

「わたくしの畑は、神さまの地面でございました。どこでも、犁を入れたところが畑でございました。土地はだれのものでもございませぬ。自分の地面などということは、言わなかったものでございます。自分のものというのはただ、自分の働きとということだけでございました。」

「ではな、言ってくれ」と王さまは言われた。「わしは、もうふたつ聞きたいことがあるのだ。ひとつは、昔はこういう穀物ができたのに、今はなぜできないかということと、もうひとつは、おまえの孫は撞木杖を二本ついて歩き、おまえの息子は一本ついて歩くのに、お前は杖もつかずにらくらくと歩いてきたばかりか、目はそのとおりはつきり見えるし、齒は丈夫だし、言葉もてきはきして、愛想がいい。それはいったいどういわけか、ということだ。なあ、じいさんよ、どうしてそんなことになったものか、それをひとつ話してくれんか」

そこで、老人は言った

「その二つのことがどうして起こったかといえば、それは、人が自分で働いて暮らすということをやめてしまったからでございます。そして他人のことはかり羨ましがるようになったからでございます。昔は暮らしかたがすっかりちがっておりました。昔は、神さまのみ心どおりに暮らしておりました。自分のものを持つだけで、ひとのものにまで目をくれるようなことはなかったのです。」

私は徒らに「昔」を懐古し賛美しようとは思わないが、語り継がれてきた「孝行のしたい時分に親はなし」や「親の意見と冷酒は後で利く」は「後悔先に立たず」という教えでもあろうし、「這えば立て立てば歩めの親心」や「子を持って知る親の恩」にしろ、「親思ふ心にまさる親心けふの首づれ何ときくらん」(吉田松蔭)とて意味深く神妙な心持ちにならざるを得ないのではなからうか。こうした情愛

や「親心」も「機械」にかまけて「たよる心」が肥大し、「他人のことばかり羨ましがるようになったから」か、「自然のままの純白な美しさ」や「靈妙な生命のはたらきも安定」を失い、親としての「道から見離されて」しまったような「児童(幼児)虐待」が後を絶たないというのも無理からぬのではなからうか。なぜならば、相変らず便利なモノづくりのための自然保護や、豊かな生活を目指すモノづくりに必要な環境保全だけが強調されがちであり、むしろ真当な人づくりのための風土にして生きがいをもつ人にとって必要な環境を保護・保全

し、維持・継承することが未来に対する私達の責務なのではなからうか。それはモノづくり以上に動・植物を含めたすべての命は、筆舌に尽くしがたいほど多くの命を包み、悠久な時空を超えて継承されてきた「靈妙な生命」であるという自覚や感動を絶やさないための秘訣にして秘論であろう。私達が考察すべき課題は、幸いにして後知恵よろしく学ぶことができるので、取り戻すことのできない過去を緋き、未来への架橋づくりに勤しむことであろう。歴史は今も息づいている故に過去を緋き、現状に対する批判や批評は、適切な政策と方向性を促し、偏重を来たす「定向進化」に抵抗する学問の一端として決して無意味ではないだろう。多くの批判や批評を生みだす源泉や抵抗を試みる心情は、祖国を憂い未来に思いを致すからであり、たとえ多く語ったとしても語り尽くせるものでも課題がなくなるものでもない。

私は明治維新以来の、いわゆる「近代的な自我の確立」を謳い、「自立自尊」を求め、「人間は考える葦である」（パスカル）や「吾思う故に吾有り」（デカルト）などの意味深長な文句に魅せられ、机上での書物を通じての観念や理性だけに囚われてしまった近代（現代）人の思考方法から脱皮しない限り、自己を正当化するだけの弁明になり「机上の空論」にとどまらざるを得ない脆弱さを思わずにはいられない。学問の殿堂と形容され最高学府と異名をとる大学が増設され、学業を修めたという「学士様」や高学歴の人々が増大し各界を構成しながら不正、不実、不祥事、奸策が摘発され、犯罪や事故が絶えないのはどうしたことであろうか。これらは「近代的な自我の確立」や「自

立自尊」を目指し、後年には「個性や人権の尊重」を謳い、「自由・平等・博愛」を掲げ、「地球や環境、人（特に弱者）にやさしい」教育の皮肉な成果なのではなからうか。なぜならば、「近代的な自我の確立」と言われても、その「近代」や「自我」の意味も、「自立自尊」の何たるかも分かっていないのである。同じく「個性」も「人権」も「自由」も「平等」も「博愛」も、「地球にやさしく」と言われても分かっていないのである。これらの言葉の意味を理解し行動するだけの歴史的な時間や背景もなく、伝統的な文化、風俗習慣も異質なだけに一朝一夕、短時日のうちに覚えられるものではないということを証左しているのである。ましてや「欧化主義」を崇拜する「不自由な思想家」である「高学歴」のインテリ教員も、「うそつきは泥棒のはじまりだよ」、「人の振り見てわが振り直せ」、「困ったときはお互い様だよ」などと通俗的な勸善懲悪を日常的な言語習慣のなかで身につけてきたのだから、机上で書物を通じて理解した気になった「近代的な自我の確立」も「個性」も「人権」も、「自由」「平等」「博愛」も、「地球（人、自然など）にやさしい」も、口さきだけで繰り返す「教育」や「講義」しても一向に理解されず効果がないのも当然の帰結なのである。⁽²³⁾むしろ学校教育を受けられなかった、俗に言う学歴のない人々（たとえば農林漁業を営んできた人、大工や左官などの職人、職工や芸人と呼ばれる人など）が早くから黙々と勤しみ継承してきた生業や仕草（多くの身体技法、身体感覚⁽²⁴⁾、言葉遣い、そして倫理観や道徳観、処世観、無常感、世間知などの伝統文化こそが学問の素材であり、

それらを体得し実行する人こそを本当の教養人というのである。従って、インテリはあくまでも知識人であって教養に疎いことを隠蔽し、露見を恐れるかのように「進歩」「発展」「開発」などを提唱し続け、保身を図ってきたのだと言ってはあまりにも穿った見方であろうか。

インテリは知識の収集に勤しむも学問の修養に努めてきたのではない。本居宣長のいう学問とは「まづ人として、人の道はいかなるものぞといふことを、しらで有べきにあらず。学問の志なきものは、論のかぎりにあらず。かりそめにもその心ざしあらむ者は、同じくは道のために、力を用ふべきこと也。」^(註)ではなかつたのか。「近代的な自我の確立」や「自立自尊」を啓蒙するために書かれた著作物や「脱亜入欧」の風潮を教材として教育すれば、確かに「自我意識」の覚醒を促し個人主義を弄ぶ口実に寄与するであろうが、かえって意識過剰に陥り

「まづ人として、人の道はいかなるものぞ」と「求道」すべき尊厳を閑却し、すでに身につけている世俗的な「倫理観」と失ってしまうだろう。従って、「高学歴」であることは必ずしも「人の道」を究めたわけでも教育に長けているわけでもなく、進歩的なインテリを濫造する目的や制度に順じた手段や条件ではないのである。

現代社会は民主的に創出され、民主的な手続きを経た色々な制度や法律によって統治されているものの、相変らずの「欧化主義」、近年では特にアメリカ迎合・追従主義によって進歩発展開発至上主義の袋小路に迷い込み、「自由・平等・博愛」の本願誇りに陥ったような状況である。学問は虚構化し知識を覚えるための勉強だけが盛んになっ

てしまい、誤解による制度の歪みや不備を重ねて心を攪乱するという悪循環を繰り返しているのだから、いくら改革の名目で新たな法律をつくり制度を施しても改善されることはないであろう。ただ、ひたすらに「進歩」を他力本願よろしく待てばよいのであるろうか。果たして「進歩」は改善に寄与し貢献し、諸悪の根源を断ち切り、「安全で明るく平和な生活」や「地球（自然・環境・人）にやさしい生活」、「個性や人権を尊重する社会」、「自由・平等・博愛に満ちた社会」、「明るく楽しい学校」などを実現し得るのであるろうか。我が省吾もまたすでに家郷に思いを寄せ、広く祖国を憂いてやまなかつたのである。省吾は次のようにうたっている。

美しい国

見渡す限りの田と畑と
 その中を輝き流れる大河と
 遠く起伏する山脈と
 晴れやかな青空と
 爽やかな微風と
 それらの中に立つて
 人生がどうして不幸であると思へよう。
 田と畑と一切の自然とは

人間に豊かな賜物を与へてゐる

けれども黙々と耕す農夫の鎌の光りに

働いても働いても抜けきれぬ貧乏が纏り

裏街を帰つてくる女工の顔は

味気なき過労に青ざめてゐる。

庭に花咲く平和さうな茅ぶきの農家には

瀕死の病人が医者にもかかれずに呻いてゐる

妙齡の処女は少しばかりの金で娼婦に売られ

青年はこの絶望の田園を見棄てて

当てもなく悲しく都を目指して峠を越える。

おお美しい山河は

あり余るものを生産しながら

人間を少しも幸福にしてゐないやうに見える、

されば凡ての人が楽しく労働し生活に歓喜を感じるやうにと

美しい山河の賜物を正しく凡ての人が受け取るやうにと

ロバート・オウエンは『協和共力の村』を計画した、

ウイリヤム・モリスは『理想郷』を描いた。

おおこれらの思想家の夢が

いつ此の世に真に現はれるだらうか、

晴れた丘の上に立つて

静かに田園を一望すれば

美しい山河は極楽そのものに見える。

しかも人々の生活の部分は地獄そのものである。⁽²⁶⁾

省吾がうたった「美しい国」も、「美しい山河」も「永遠であれ」

という祈りを込めて目の前の醜態や不幸な現状を捉えたのである。従つ

て、過去の目の前の醜態や不幸な状況を改める方法を探求し施行して

いくのが政策ではないのか。現下に施されている政策や制度によつて、

今も猶「人々の生活の部分は地獄そのもの」のように思われては

ならない。また、科学技術による開発や進歩によつて作られた多くの

モノに囲まれ、刹那的な快楽や虚宴に溺れ、気安めに「便利で豊かな

生活」を誇張してはいないだろうか。モノは日進月歩の如く進化、劣

化、退化、変化するので、モノによる「便利で豊かな生活が幸せ」と

ばかりに追求すれば、モノの機能や性質に依存する自由と共に、モノ

に縛られながら稀薄な人間関係に陥つてゆく自由をも与えられ、引き

こもりつつ淋しさを訴える多くの人々によつて何が幸せなのかを教え

られているのではなからうか。多くのモノはモノの原郷である山川草

木や田畑などの地力を疲弊させ、母なる自然の逆襲をそそのものである。

私は「学びて思はざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し。」

『論語』の「為政第二」より）の教えに俟つまでもなく、「味気なき

過労に蒼ざめてゐる」「女工の顔」や、「瀕死の病人が医者にもかかれ

ずに呻いてゐる」「農家」があったこと、そして「少しばかりの金で

娼婦に売られ」た「女」や、「この絶望の田園を見捨てて」「都を目指して峠を越え」て行った「青年」のいたことを学び、それらをして学問の真意を問ねれば、「子曰く、由、女に之を知るを誨へんか。之を知らずと為す。是知るなり。」、『論語』の「為政第二」より）にして、「誠は、天の道なり。之を誠にするは、人の道なり。」、『中庸』の「第四段第一小段」より）との思いを致し、今も猶息づいている古典を繙き、受け継がれている民衆の知恵や言葉、苦悩や生きざまなどを消化吸収することが「人の道」を究めるべき「人の道」なのではないかという感慨を強くしたのである。

千 葉 貢
私は現実を鑑みて未来を慮る故に、民衆詩派の詩人と呼ばれる白鳥省吾の著作を通して、「文明開化」に伴う「近代化」の施策によって苦しんできた農林漁業民の窮状や実情、農山漁村の実態を捉えて哀訴にして告発した言葉を介して内なる真情や真実を読まずにはいられないかったのである。省吾の作品を総称する「民衆詩」は、「不自由な思想家」であるインテリたちが自由に口走った「文明」や「近代化」の施策によって翻弄された人々の嘆きや怒り、怨念を秘めた言霊信仰の具現であり、言語文化の結晶である。作者の省吾と同じ風土のなかで培われてきた過去をもち、同じ血脈を連ねてきた同胞に対する連帯感であり愛情である。郷土を愛する故に未来を憂い現状を批判したのである。省吾を創作に掻き立てたのは、国策に翻弄され社会的に疲弊していく郷土や祖国の救済を願う愛郷心（patriotism）であり祖国愛であつたと言えよう。省吾自身が次のように述べている。

偉大なる詩人には、インターナショナルな要素とその属する民族と国土に対する愛とがある。アメリカのホイットマン、インドのタゴール、アイルランドのイエーツ、等その一例として挙げる事が出来る。愛といふのは必ずしも讃頌でなくして、ホイットマンの如きは「私はアメリカの歌ふを聴く」という楽しい歌をつくつてゐると同時に、同時代の虚偽と実利主義とを徹底的に排撃してゐる。その排撃は現在の同国に対しても真であらう。若しそうでなくして盲目的な国民主義であるならば、彼等の詩は価値なきものである。インターナショナルな要素があればこそ、国境を越えて万人の胸に響くのである。

芸術家はその属する国土と民族に対して愛を持つことは、とりもなほさずその素質を生かすことである。これを植物にたとふれば、杉は杉である喜びを風にそよがし、榊はその榊である喜びを日に歌ふ如きものである。

省吾は自分を育ててくれた郷土や民族（nation）にとどまらず、「インターナショナルな要素」の必要性にも意識して創作活動に徹していたのだから、「連の「民衆詩」のなかには省吾の人間性が宿り、もの事の普遍性も捉えられているのである。それはまた、田中義久氏が言うように、「批判とは対象の危機を救つ作業にほかならない。」のだから、省吾が「文明は腫物のごとく田園を病ましむ」と嘆き、告発

した「文明」による「田園」の疲弊や荒廃を悲観し、郷土を含めた祖国の危機を救済すべき新たな意識や制度を構築しなければならぬという「インターナショナル」な民衆の声を訴えたのである。省吾は、詩集『共生の旗』に収めた数々の作品を創作した「一九二一年（大正十年）」の、時に五十一歳以前から郷土を含めた「田園」の荒廃と疲弊を目の当たりにして施策の矛盾や歪みを告発しながら、人間と自然の「共生」を訴え続けてきたのである。それは決して後知恵ではない、農村に生まれ「田園」を体得して来た者（省吾は明治二十三年二月十七日、宮城県の北部、栗原郡築館村（現在は町制）で代々農業を営んできた家の次男として生まれ育った人であり、大正二年六月に早稲田大学英文科を卒業した人である）の真実な感受性の所産である。そこが「欧化主義」に気触れて西洋の知識だけを偏重し飽和した「不自由な思想家」であるインテリとの大きな違いであり、農業という伝統的な生業と共に身をもつて培い醸し紡いできた人世の教養を備えた者としての違いでもある。

民衆詩派の詩人・白鳥省吾の普遍的な詩魂は前近代を越えて近代を貫き、「進歩」に託けた軽佻浮薄な変化（流行もその一つ）や、「便利で豊かな生活」を煽る不純な利害打算の奸策にも乗じない人々と共に揺ぎ無く、確かに「共生」し続けているのである。だから今は亡き浅野晃先生が憂慮されて述べた、「今日の日本の学問は、こうした国の危機に抵抗するところから力つよく生まれるべきである。」⁽²⁸⁾という期待や願いは、新たな命と共に「力つよく生まれ」て絶えることなく継

承されていくであろう。たとえ観念的な期待や願望であっても、先師が説いた「落葉帰根」「運命随順」の自然も、有為転変にして「生者必滅」の無常感を悟し、可惜の精神を育んだ「自然法爾」の道も決して何もしない自然ではない。常に不条理と闘い、苦節に耐え、困難を克服し続けていることを忘れてはならない。身土不二、身心一如、知行合一（王陽明）の道を求め、実践に勤しむことが「文明」の真意であり「近代化」の命題ではなかったのか。

今や、瑞穂の国と形容された私達の祖国や風土は精彩を失いつつあり、人心もまた「基本的な人権の尊重」や「教育の機会均等」によって「高学歴」のインテリを大量に教育し輩出してきたものの公序良俗には至らず、むしろ「学級（学校）崩壊」「学力低下」が指摘され、親子や夫婦の間でも陰湿な「いじめ」や虐待、暴力が横行し、「自由・平等・博愛」を謳う高尚な民主主義を掲げながらも、国政選挙に限らず各地方選挙に於いても投票率は低く、巧妙な手ぐちによる犯罪や残忍な事件、悲惨な事故などが連日報じられ、あれこれ枚挙に暇ないほど続出しているのはどうしたことであろうか。それでは政治や行政の専門家がいない？ 民主主義が進歩していない？ 科学技術の力が足りない？

そして多発する事件や事故、投票率が低いのも客観的にして合理的な根拠がない？ などと傍観してよいのだろうか。またしても「不自由な思想家」であるインテリたちは、個人の自由、個性や人権の尊重を進歩的、な口調で弁明するであろう。すでに身体的空間と呼

ばれる人間文化の風土が荒廃し、存続が危機に瀕しているのだから新たな決意と施策が必要不可欠なのである。新たな決意 それは雑誌を含む書物を閉じ、テレビやラジオ、電話などのマス・メディアと言われる文明の利器や連日もたらされている情報に頼らず、頭上に広がる昼の青空、夜の星空を見上げたり、目の前に広がる樹木を見渡し、

葉ずれの音に耳を傾け花の香りに身を寄せたり、昇る朝日や沈む夕日を眺めるのもよいだろう。あるいはまた素敵な詩歌を朗唱すれば、猜疑心や狡猾に満ちた虚勢を張りたがる性癖を癒し、やがては李徴が虎にならざるを得なかつたような「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」も消え、感受性に満ちた素朴な自己を回復するであろう。そうして季節の花を愛でては雲の行く方、風の囁きに思いを寄せる素朴な人こそ

千 葉 貢

が「近代的な自我の確立」した人であり、そうした素朴な人を養成するのが「基本的な人権の尊重」なのではなからうか。昨今のマス・メディアが放出する作為された多くの情報に攪乱される不自由な暮らしから脱皮するためにも、我が省吾が「美しい国」のなかで、「晴れやかなの青空と／爽やかなの微風と／それらの中に立つて／人生がどうして不幸であると思へよう。(中略)おお美しい山河は／あり余るものを生産しながら／人間を少しも幸福にしてゐないやうに見える」などとうたった郷土愛や社会的な義憤を知り、感傷に佇んでみてはどうだろうか。さらには省吾の詩集『共生の旗』(一九二二 大正十一年六月十日発行)の前後に生きた、金子みすゞ(一九〇三 明治三十六年四月十一日、山口県大津郡仙崎村 現在は長門市 に生まれにして、

一九三〇 昭和五年三月十日下関市にて逝去、享年二六歳)が、生来の素朴な自己を愛惜しながらうたった、紅涙にも等しい珠玉の数々、そのなかの次のようなうたを口遊んでみてはどうだろうか。

星とたんぼぼ

青いお空のそこふかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまで沈んでる。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬけれどもあるんだよ。

散つてすがれたたんぼぼの、
瓦かわのすきに、だアまつて、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ、
見えぬけれどもあるんだよ。

洗練された心情の結晶であると思われるのだがいかがであろうか。一度だけではなく何度でも口遊みたくするのは決して私一人ではないだろう。星、たんぼぼ、空、海、そして、巡ってくる春の広が

り、折りなす風景の彩りを醸しだす風土を維持継承することが私達の使命なのではなからうか。季節と共に移ろつ風景もまた立派な文化遺産であり、その風土が息づいていけばこそ色々な命も再生され、その新しい人々によって新しいうたが生みだされたり懐かしいうたを思い出し口遊んだりして、生死一如の人生を歩いていくことだろう。新しい命の生まれてくるなかで、すでにこの世にいる私達の命が日に日に老いていくのは無理ならぬ無常であり必然である。だから、それは決して無情ではない。

（ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授）

〔注〕

- (1) 白鳥省吾の詩集『共生の旗』（新潮社、大正十一年六月十日発行）一七七―一七九頁。「地の叫び」の章より引用。猶、本稿は論題にて示した通り、詩集『共生の旗』について考察を続けているものである。この序章は『共生の旗』のもとで「と題して本誌『地域政策研究』第四巻第二号（平成十三年十二月二十七日発行）にて論述した。同じ論旨で重複も多いが参照して戴ければ有難い。
- (2) 白鳥省吾『詩に撒する道』（日本評論社、大正十年十二月十二日発行）一一〇頁。「詩の諸問題」の章より引用。
- (3) 平成十三年十二月末現在、日本の完全失業率が五・四％、三三〇万人を数え、特に二十歳代の失業率が一〇％を越えるという深刻な状況である。また、平成十四（二〇〇二）年二月八日（金曜日）付の「読売新聞」（朝刊）は、「今春卒業予定の高校生のうち就職希望者の昨年十二月末現在の内定率は67・8％と、一九九九年の同時期を3・5ポイント下回り、過去最低を記録した」と報じていた。

- (4) 田中義久『私生活主義批判 人間の自然の復権を求めて』（筑摩書房、一九七四年一月三十日発行）六十六―六十七頁。
- (5) 原剛『農から環境を考える 21世紀の地球のために』（集英社新書、二〇〇一年五月二十二日発行）七十八―七十九頁。
- (6) 新村出編『広辞苑 第四版』（岩波書店、一九九五年十一月十日発行）二二九四―二二九五頁。
- (7) 『エリオット全集』第五卷（中央公論社、昭和三十五年八月十日初版発行、昭和五十四年一月三十日改訂三版発行）十頁。「伝統と個人の才能―一九一九年（深瀬基寛訳）の章より引用。
- (8) 注（7）に同じ。二二七頁。「文化の定義のための覚書一九四八年」（深瀬基寛訳）の章より引用。
- (9) 『莊子（内篇）』（金谷治訳注、岩波文庫、一九七一年十月十六日第一刷発行、一九九四年六月六日第三十六刷発行）二二二頁。「応帝王篇第七」の章より引用。
- (10) 『世界の名著4 老子莊子』（中央公論社、昭和四十三年七月二十日初版発行、昭和四十四年七月五日三版発行）八十七頁下段―八十八頁上段。老子上篇（小川環樹訳）第十六章より引用。
- (11) 『日本思想大系24 世阿彌禪竹』（岩波書店、一九七四年四月九日第一刷発行）三十五頁。「風姿華伝 第三問答茶々」の章より引用。
- (12) 注（11）に同じ。六十二頁。「花伝第七別紙口伝」の章より引用。
- (13) 『トインビー著作集2 歴史の研究II』（社会思想社、昭和四十二年四月十日初版第一刷発行、昭和四十三年六月三十日初版第三刷発行）六十五―六十六頁。「第十八章 社会体の分裂」（長谷川松治訳）より引用。
- (14) 私はかつて、夏目漱石の小説『こゝろ』のなかで用いられている「明治の精神」について考察したことがある。ひと言で言えば「義憤」である。初出は『明治の精神』考 近代文学試論（高崎経済大学論集）第三十三巻第二号、平成二年九月三十日発行。後に、小著「近代」と闘った人びと 作家・作品論考（高文堂出版社、平成六年九月二十日初版発行）

のなかに、「序論『明治の精神』考 近代文学試論」と題して加えた。参照して戴ければ有難い。

- (15) 『漱石全集』第十一巻(岩波書店、一九六六年十月二十四日第一刷発行、一九八五年八月二十二日第三刷発行)三三三頁。「現代日本の開化」と題し「明治四十四年八月和歌山に於て述」という講演より引用。
- (16) 『中島敦全集』第四巻(文治堂書店、昭和四十九五月末第七版刊行)一七三頁。
- (17) 『金子みすゞ童謡集』(ハルキ文庫、一九九八年三月十八日第一刷発行、一九九八年十二月八月第四刷発行)一一頁。
- (18) 注(10)に同じ。三一九頁上段 下段。「莊子」のなかの「外篇、第十二天地篇の三」の章より引用。
- (19) 私はかつて『見る』その創造性」と題して、風景を眺めることの大切さを論述したことがある。小著『人間性の探究——言語文化試論』(高文堂出版社、昭和五十五年十一月十五日初版発行)四十一頁以下に所載。
- (20) 平成十三(二〇〇一)年九月十四日(金曜日)付の「河北新報」(本社宮城県仙台市)朝刊は「東北大学電気通信研究所グループ」の研究結果として、「コンサートやヘッドホンステレオなどの大きな音にさらされる危険性や聴力の保護に対する若者の意識は、日本はフィンランドに比べかなり低い。」などと、「日本の若者は騒音に鈍感?」「低い聴力保護意識」「難聴がまん延の恐れ」「フィンランドとの比較調査」などの見出しを掲げて報じていた。
- また、平成十三(二〇〇一)年五月二十七日(日曜日)付の「朝日新聞」(本社、東京都中央区)朝刊は、「ホームで殴られ重体」「東京・東村山 男2人が逃走」「乗り換え駅、電車満員」などという見出しで次のように報じていた。「電車に乗る際、『中の方が空いているので、もう少し詰めてくれなかな』と乗客に話しかけた。西武遊園地駅に到着した4時40分ごろ、男性がホームに降りたところ、二人組の男が『おれたちに因縁をつけた』と言い寄ってきて、2人のうち1人がラリアートと呼ばれるプロレスの技

- で首付近を殴打したという。男性は反撃しようとしたが倒れたという。この記事の終わりに「接触嫌う人々」という見出しに続いて、「評論家・芹沢俊介氏の話」が加えられていたので紹介したい。芹沢氏は「最近、老若男女を問わず電車の中では詰めずじまり座ろうとする人がほとんどだ。他人との物理的接触を嫌っている。空間の中で自分の占める位置を自ら囲む。私はこれを『自己領域化』現象と呼んでいる。車内で化粧したり携帯電話で話したりするのも、自分を勝手に周囲と隔絶している。ひとたびこの『自己領域』が言葉や視線、接触などで侵犯されると、『攻撃』と受け取り、瞬間的にヒステリックになってしまう。やっかいなのは、人によってどの程度を『侵犯』と感じるかが違うということだ。」と述べている。ここに「自己領域化」という新しい名称が登場したのだが、この原因を究明し、除去することが急務なのではなからうか。「時代が変わったのだ」「個性の尊重」「個人の自由」などとして放任することが「人権の尊重」ではないと思っただがどつらう。
- (21) 『新釈漢文大系35 孝経』(明治書院、昭和六十一年六月二十五日初版発行、昭和六十一年八月二十五日再版発行)七十八頁。「開宗明義章 第一」より引用 引用した「孝の始めなり。」に対して、「身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顕はすは、孝の終りなり。」(八十一頁)と教えている。
- (22) 『トルストイ民話集 イワンのばか』(岩波文庫、一九八〇年三月二十日第四十四刷発行)一一一―一二二頁。「鶏の卵ほどの穀物」の結末より引用。
- (23) 加地伸行、教養 は死んだか 日本人の古典・道徳・宗教』(PHP新書、二〇〇一年十一月二十九日第一版第一刷発行)を一読するに及んで大いに共感した。「国語力を鍛えてきた漢文学習」(一二四頁以下)や、「生きていく通俗道徳」(二〇〇頁以下)などを含め大いに教えられた。ぜひ一読して戴きたい。
- (24) 斎藤孝『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』(NHKブックス、二〇〇〇年八月三十日第一刷発行、二〇〇一年六月十日第七刷発行)のなかの「第二章 失われゆく」からだ言葉」と身体感覚」(六十三頁以下)や

「第三章 型と技を見直す」（九十三頁以下）などを含め、全章にわたって大いに教えられた。ぜひ一読して戴きたい。さらには「身体加工」の現況についてあれこれ指摘している、鷲田清一「悲鳴をあげる身体」（PHP新書、一九九八年十一月四日第一版第一刷）の一読をもお勧めしたい。

(25) 本居宣長『うひ山ふみ・鈴屋答問録』（岩波文庫、一九三四年四月十日第一刷発行、一九八〇年九月二十日第二十二刷発行）二十五、二十六頁より引用

(26) 注（一）に同じ。一八六―一八八頁、地の叫び」の章より引用。

(27) 自然の逆襲にとどまらず、人間による逆襲、歴史の逆襲、文化の逆襲などもあり得るだろうと考えていたら、菅野覚明『神道の逆襲』（講談社現代新書、二〇〇一年六月二十日第一刷発行）を見つけたので早速読んだ。神に無関心にして無神論、無信仰を自認してきたが、そんな私のなかにも産土神や氏神様、水神様、山の神、龍神、屋敷神などを含め、八百万神の一部に身に覚えがあり、血肉に宿っていることを教えられた。

(28) 白鳥省吾『感想集 土の芸術を語る』（聚楽園、大正十四年二月二十日発行）一四二頁、「民族の詩 郷土の詩」の章より引用。

(29) 注4に同じ。三十七頁、「私生活主義批判」の章より引用。

(30) 浅野晃『主義にこころ者』（日本教文社、昭和三十年五月二十五日発行）八十七頁。

浅野晃先生は今は亡き愚生の学部時代からの恩師であり、娘の名づけ親でもある。職を得て母校を離れた後にもご自宅に伺い、醫咳に接し、あれこれ貴重なお話やご指導ご鞭撻を賜った。逝去される数時間前まで先生の枕元に立ち尽くし、邂逅の有難さと喜びとを脳裏に浮かべながら、そのお顔を拝していたことを思いだす。逝去（平成二年一月二十九日、享年八十八歳）されて十三年目。学恩に報いられる何ものもない。先生の慈顔や学恩を忘れることなく精進し続ける他はないと思っっている。

(31) 私もよく「自由・平等・博愛」や「民主主義」を思い、「個性・人権の尊重」を口走るのだが、期待するほどの効果はない。それはまだまだ真意について理解していないからだと思っ。そこで、長谷川三千子『民主主義とは何なの

か』（文春新書、平成十三年九月二十日第一刷発行）や、八木秀次『反「人権宣言」』（ちくま新書、二〇〇一年六月二十日第一刷発行）を読んでみた。二書を通じて、「西洋と日本の違い」を教えられ、大いに共感した。一読をお勧めしたい。また、井橋は「伝統の創造力」（岩波新書、二〇〇一年十二月二十日第一刷発行）のなかで、「いかに民主主義がタマエ工としてのみ流通しており、日本の社会が民主主義を思想のレベルで捉えていないという状態を示しているのではないか。こうした状態のなかで展開される国会などの論争が不毛であることは言うを俟たない。」（八十頁）などと述べている。

(32) 注（一七）に同じ。一〇八頁。

附記 引用文献のなかには歴史的仮名遣いのものもありますが、字体だけの一部改め仮名遣いは原文通りにし、名残りをとどめました。

猶、この小考をものするにあたり使用しました白鳥省吾の著書や研究書等の購入、あるいは白鳥省吾の家郷・宮城県栗原郡築館町を中心とした近隣地域での資料収集や巡検等の費用には平成十二年度の高崎経済大学特別研究奨励金や高崎経済大学後援会より頂戴した研究助成金を活用いたしましたことを申し添え、関係各位の御高配、御支援に対し謹んで御礼を申し上げる次第であります。